鉄のカーテンから「共生型」国立公園へ
-ディイェ渓谷に二つの国立公園が誕生するまで-

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 明治大学経営学部人文科学研究室
	公開日: 2019-11-29
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 薩摩, 秀登
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20483

人文科学論集　第65輯（2019.3）

鉄のカーテンから「共生型」国立公園へ
――ディイェ渓谷に二つの国立公園が誕生するまで――

薩　摩　秀　登

はじめに

ウィーンから約80キロメートル北へ向かい，チェコ共和国との国境線を越えると，ズノイモという街に到着する。街はディイェ Dyje 川（チェコ語名。ドイツ語ではタヤ Thaya 川だが，本稿ではチェコ語名を用いることにする）の深い谷に面した高台に位置している。ここから西へ川の上流に向かって，チェコとオーストリア両共和国の境界線をはさみ込む形で，チェコ側のポディイー国立公園 Národní park Podyjí（1991年3月設立，ポディイーは「ディイェ川流域」を意味する）とオーストリア側のタヤタール国立公園 Nationalpark Thayatal（2000年1月設立，タヤタールは「タヤ川の谷」を意味する）が広がる。もう少し詳しく述べると，ポディイー国立公園はチェコ共和国モラヴィア地方の南モラヴィア州に，タヤタール国立公園はオーストリア共和国の下オーストリア州に属している[1]。

二つの国立公園はどちらも東西に細長く伸びているが，双方合わせても長さ20キロメートル弱，幅5キロメートルほどで，いずれも国立公園としては小規模である。しかし国境河川となって複雑に蛇行しつつ流れるディイェ川の両岸は，随所で手つかずの深い原生林に包まれ，独特な渓谷美を誇るとともに，絶滅危惧種も含めた多様な動植物が生育する貴重な自然空間となっている。また中世都市の面影をとどめるズノイモが東側の入り口になっているほか，公園内には，「オーストリア最小の街」ハルデックにそびえる半ば廃墟となった壮麗な城や，華麗なバロック風装飾の施された大広間で有名なチェコ側のヴラノフ・ナド・ディイー城など数々の史跡が点在する。そしてそれらを結ぶようにして，貴重な自然を傷つけないよう配慮しつつ多くのハイキング道やサイクリングコースが設けられ，人々に憩いの場を提供している。

しかしこのディイェ川流域は，第二次大戦後の1940年代末から冷戦が終結する1989年まではまさに東西ヨーロッパを隔てる鉄のカーテンの一部であり，特にそのチェコ側一帯は一般人が立ち入ることなど思いもよらない場所であった。さらに時代をさかのぼれば，この一帯には

チェコとオーストリアの境界としての変遷に満ちた歴史がある。冷戦終結からほぼ10年後に二つの国立公園が渓谷を両側から包み込むようになるまでの過程には，ヨーロッパの中央に位置する国境地帯という地理的特性に基づくこの地域独特の事情が関わり合っているのである。本稿ではこの地域の歴史を振り返りつつ，その経過に焦点をあててみたい。

1. 国境河川ディイェ川

ドナウ川水系の一河川ディイェ川の水源は，ズノイモから南西へ100キロメートルほど離れたオーストリアのシュヴァイガース村の近く，標高658メートルの地点にある。すぐ西側にはラインジッツ川の水源があるが，こちらは北へ流れてチェコ領に入り，エルベ川の支流ヴルタヴァ川（チェコ語名。ドイツ語ではモルダウ川）へ注ぐ。すなわちこのあたりはドナウ川水系とエルベ川水系の境目であり，まさにヨーロッパの分水嶺に位置することになる。

ディイェ川は少し下流のラープスの町で，チェコ領内に水源をもつモラヴィア・ディイェ Moravská Dyje 川と合流する。さらに北東へ流れてチェコ領内に入った所に，1930～34年に作られたヴラノフ貯水池があり，自然の河床は失われているが，その代わりに海のないチェコやモラヴィアの人々に貴重な水辺のレクリエーションの場を提供している。このヴラノフの下流で流れは再び国境線と出会い，深い渓谷を形作る。川の水面から両岸の丘陵地帯の頂上までの標高差は時に300メートル近くに及んでいる。ズノイモから南西約10キロメートルの地点まで河川の中央が国境線となっており，両側からポディイーとタヤタールの両国立公園がはさみこむ形になっている。

ズノイモから下流で川はゆったりとした平野に入り，時々国境線をかすめつつほぼチェコ領内を東へ流れていく。途中に東西15キロメートルにわたるノヴェー・ムリーニ貯水池があり，やはり格好のウォーター・スポーツの場である[(2)]。その下流でディイェ川はまたもや国境の河川となって南へ流れ，オーストリアのホーエナウ村の東でマルヒ川に注ぐ。この地点はオーストリア，チェコ，スロヴァキア三カ国の国境でもあり，標高は148メートル，水源からここまでディイェ川の全長は235キロメートルに及ぶ。そのうち45キロメートルが国境線となっている[(3)]。マルヒ川はここから約50キロメートル南へ流れ，ブラチスラヴァ郊外の古城ジェヴィーンの足元でドナウ川に注いでいる。

ディイェ／タヤという名称の由来は定かではないが，イリリア語で Dujas は「ざわざわ流れる川」を意味するといい，これがスラヴ語に取り入れられて Dyje となり，さらに中高ドイツ語で小川を表す aha / ahe と結びついて Tiahe，Thaya となったと考えられている[(4)]。

川の両岸は平地が少ないので人が住むにはあまり適さなかったが，少し離れた高台では古い

時代から集落が営まれた。9世紀前半からスラヴ系の人々が，そして1100年前後からドイツ系の人々がこの地域の住人であったことが，地名から推測できるという[5]。

2. 歴史的背景――近世まで――

川をはさんでチェコとオーストリア両国がどのように向かい合ってきたのか，簡単にたどってみよう。チェコでは9世紀末から10世紀にかけてプシェミスル家が統一して国家を築き，11世紀にはモラヴィア地方も支配下に収めた。モラヴィアは12世紀に辺境伯領となったが，政治的にはなおもチェコ王に従属していた。またドナウ川流域には10世紀末にドイツの一部としての「東方マルク」（後のオーストリア大公領の前身）が成立し，バーベンベルク家がこれを統治した。その結果ディイェ川はチェコとオーストリア両勢力の境界線となり，一進一退の領土争奪戦が繰り広げられていく。その詳細はここでは省くが，その過程で川の両岸には軍事的拠点として多くの要塞や城が建てられることになった。ヴラノフの急峻な断崖の上にはすでに11世紀に小規模な城塞が築かれ，ハルデック城も12～13世紀には姿を現していた。ズノイモも，11世紀前半にプシェミスル家が建てた城塞に近接して生まれた集落が，後に発展して成立した都市である。

モラヴィアとオーストリアの境界線は，最終的に，プシェミスル家の地位を引き継いだルクセンブルク家のチェコ王ヨハンと，バーベンベルク家の地位を引き継いだハプスブルク家のオーストリア大公フリードリヒが1328年に結んだ協定によってほぼ決定した[6]。ただし領域区分は明確になったとはいえ，それは境界線に沿って住民の住み分けが厳格に行われたという意味ではない。この時期にはモラヴィア側とオーストリア側の双方で積極的な開墾や集落建設が進められ，それはしばしば境界線を乗り越える形で進行した。こうしてこの地域はスラヴ人とドイツ人の一種の混住地域となったが，特にオーストリア側からモラヴィア側への進出は盛んであった。その結果ズノイモを始めとするモラヴィアの境界領域ではドイツ系の住民が高い割合を占めることになった。ズノイモやヴラノフも，それぞれドイツ語でツナイム，フラインと呼ばれることが多かったであろう。つまりヨーロッパ各地で見られるように，この地域においても，政治的境界線と言語の境界線は一致していなかったのである。

しかも，チェコ側とオーストリア側の君主たちや貴族たちは，すでに中世から姻戚関係などで互いに深い結びつきがあったが，その結果として1526年にオーストリア大公フェルディナント1世がチェコ王に選出された。これはこの年にチェコ王ルドヴィーク（ヤゲウォ家）がハンガリー南部のモハーチにおけるオスマン帝国との決戦で落命し，後継者を残さなかったために実施された国王選挙である。すなわちチェコ側の自由な意思に基づくものであって，チェコ

とオーストリアは政治的に統合されたわけではなく同君連合として結びつけられたに過ぎない。

しかし1618年にチェコ側のプロテスタント貴族がハプスブルク家に対して起こした叛乱が2年後に鎮圧され，その帰結として1627年に制定された『改定領邦条例』によって，ハプスブルク家によるチェコ支配は確定した。王は忠実な家臣や軍人を外国から呼びよせてチェコやモラヴィアの貴族として認定できることになり，この地域の社会とハプスブルク家の結びつきは一層強まっていった。また，1713年にカール6世が発した『国事詔書』（プラグマティシェ・ザンクツィオン）には，ハプスブルク家のあらゆる領土の一体性が定められていた。こうしてチェコやモラヴィアはしだいにハプスブルク帝国を構成する領国となり，行政機能もプラハを離れてウィーンに吸収されていく。チェコやモラヴィアのスラヴ系住民は決してハプスブルク家によって民族的同化を求められたわけではないが，ドナウ川流域の多くの国々を統合して君臨する王朝の圧倒的な権威のもとで，チェコやモラヴィアが政治的にだけでなく社会的・文化的にも帝国の一部としての性格を強めていくのは必然的な流れであった。境界線としてのディイェ川の意味もしだいに薄れていき，川の両岸の住民は以前にもまして緊密に結ばれるようになり，国境をほとんど意識しない地域社会が形成されていった。こうした状況の下で，モラヴィアの南部国境地帯がさらに「ドイツ化」されていくのも当然であったといえる。後の1930年代になって，チェコスロヴァキアの周縁地域に住むドイツ系住民がズデーテン・ドイツ人を名のるようになると，モラヴィア南部のドイツ系住民たちも基本的にその一部になっていく。

3. 分断されたディイェ渓谷

近世までのディイェ川流域の地域社会がたどった歴史について詳細は別稿に譲ることにして，ここでは20世紀に入ってからの状況を簡潔に記すにとどめておこう。

1918年秋，第一次大戦終結とともに敗戦国としてのハプスブルク帝国は解体し，10月28日にプラハでチェコスロヴァキア共和国成立が宣言された。ディイェ川沿いの境界線は新生国家チェコスロヴァキアとオーストリアを分かつ正式な意味での国境となり，さらにチェコスロヴァキアは1919年9月10日のサン・ジェルマン講和条約によっていくつかの市町村を獲得した。ドイツ系住民は，少数民族として共和国内にとどまることになった。ただしこの時点ではまだ比較的自由に国境を行き来することができたので，国境をまたぐ地域社会それ自体が解体したわけではない。

しかしこの後，ディイェ川流域の社会は歴史始まって以来の大変動を経験することになる。

1938年3月にオーストリアはドイツ第三帝国によって併合（合邦）された。続く9月のミュンヒェン会談の結果，南モラヴィアの国境地帯も含めてチェコスロヴァキアのズデーテン地方がドイツに併合されたため，この時点でディイェ川は国境ではなくなった。そして翌39年3月にチェコとモラヴィアがドイツの保護領と宣言され，この付近はメーレン（モラヴィアのドイツ語名）と「下ドナウ」の境界領域となった。しかし1945年にドイツ帝国が敗戦によって解体し，第二次大戦が終了したことにより，サン・ジェルマン条約が定めたチェコスロヴァキアとオーストリアの境界線が復活したのである[7]。

これはディイェ川両岸に長年形成されてきた地域社会の終焉を意味した。大戦終了とともに，チェコやモラヴィアの各地ではドイツ系住民に対する報復行為が生じていたが，その後ベネシュ大統領によってドイツ系住民の財産凍結・没収，市民的権利の制限などが定められ，ほぼ1947年までに約300万人が追放あるいは自主的退去によってチェコスロヴァキアから姿を消すことになった[8]。当初はナチス政権への協力者に限った措置とされていたが，戦後の混乱の中でそうした区別はほとんど問題とされなかった。ズノイモなどモラヴィアの南部境界地帯もその例にもれず，ドイツ系住民が退去して大きく人口を減らした都市や農村には，チェコスロヴァキア各地から新しい住民が移り住んだ。

こうして様相を一変したこの地域に，冷戦というもう一つの激動が押し寄せる。1948年2月にチェコスロヴァキアには共産党主導の政権が誕生し，徐々にこの国は東側陣営に組み込まれていった。国境の通過がただちに厳しく制限されたわけではなかったが，東西対立の深刻化に伴い，外国，特に西側諸国との国境は厳重に管理されていく。

1951年，チェコスロヴァキア政府はオーストリアおよびドイツ連邦共和国との間にいわゆる「国境地帯」を設けた。国境線と，約2キロメートル手前に設けられた二重の有刺鉄線による防御柵によって囲まれた国境地帯は，東のブラチスラヴァから共和国最西端のアシュまで全長700キロメートル以上におよび，その面積は現在のチェコ共和国の面積の約1パーセントを占めた。有刺鉄線には高圧電流が流れ，車両の進入を阻止するための障害物が設置され，ほぼ等間隔に監視塔が設けられた。国境線と防御柵の間の住民は強制退去させられ，ごくわずかの森林監視員や農業関係者，その他内務省の許可証を手にした人々以外は一切の立ち入りを禁止された。現在，ポディイー国立公園管理事務所の所長代理を務めるヤン・コス氏によれば，この地域では柵は二度にわたって国土の内側へと移動され，現在の国立公園区域の約80パーセントがこの国境地帯によって占められていたという。柵沿いには作業用の舗装道路が設けられたが，これらはポディイーの複雑な地形を完全に無視した非常に不自然な形状をしており，かつては一体であった森林区画を分断し，丘を直線的に乗り越え，ディイェ川の支流が作る渓谷を直角にまたいでいた。すでに第二次大戦以前から，ヴラノフとズノイモの間にはハイキング

道が縦横に作られていたが，そのうち残されたのは国境から比較的離れた「玉座 králův stolec[9]」および「ゼールスフェルト岩 Sealsfeldův kámen」と呼ばれる景勝地へ向かうものだけで，それ以外は全く近づくことができなくなった。また，今では国立公園になっている区域には国境を越えるルートがいくつか存在していたが，これらもすべて通行不可となった。ズノイモ南方にあるハチェの検問所と，約 50 キロメートル西のノヴァー・ビストシツェの検問所の間では，国境の通過は一切不可能となったのである[10]。

皮肉なことだが，こうしてディイェ渓谷の北側が国境地帯に組み込まれたことにより，この地域における人間の活動が制限され，林業や農業のためにもほとんど利用されなくなったことで，その自然は手つかずのまま維持され，貴重で豊かな動植物の生息地域も守られることになった。このことは当時のチェコスロヴァキア政府によってすでに認識されており，1978 年 12 月 11 日に景観保全区域ポディイーが創設された[11]。その総面積は 106 平方キロメートルで現在の国立公園よりも広く，ズノイモ市街地の一部やズノイモ南方のシャトフ村周辺も含んでいた。とはいえその主要部分はほとんど立ち入り禁止の国境地帯が占めていたため，観光やレクリェーションの対象としてはほとんど意味をなさなかったと思われる。

4. 国境開放，そして国立公園設立へ

しかし 1989 年秋に東欧諸国の社会主義政権がこぞって崩壊する中，チェコスロヴァキアも 11 月から 12 月にかけて体制転換を果たし，西側諸国との自由な通行も再び可能になった。ディイェ渓谷一帯においても 1990 年半ばまでに，無用となった国境地帯の障害物はほぼ撤去された。89 年のクリスマスには，長らく通行不可となっていたハルデックの橋でチェコ側とオーストリア側の住民の「対面」が実現し，翌年 4 月 12 日に橋は公式に国境通過地点として復活した。橋のオーストリア側にあるかつての税関の建物は，その後ポディイー国立公園管理事務所によって修復された。現在その内部には橋やその周辺の歴史に関する小さな展示が設けられており，1938 年から 39 年にかけて緊張が高まる中で作られた軍事施設，ほとんど鉄骨だけしか残されていない冷戦期の橋，そして 90 年 4 月の（ちょうど復活祭の時期にあたっていた）祝賀的な気分などが解説付きの写真でたどれるようになっている。同じ 1990 年には，ズノイモ南方に位置するチェコ側のフナニツェとオーストリア側のミッターレッツバッハを結ぶ道路も通行可能となった[12]。

国境の開放とともに，自然科学者や自然保護活動家たちの視線がこのディイェ川流域に集まったのも当然であった。体制転換から事実上わずか一年後の 1991 年 3 月 20 日に総面積 6,260 ヘクタールのポディイー国立公園設立が実現したのは，冷戦下の国境地帯であったがゆえに手

つかずで残された自然を，開発の手が及ばないうちに保護する体制を早急に整える必要性が広く認識されていたためであろう[13]。しかしうがった見方をすれば，チェコ側の保護対象区域の大部分が事実上の「無人の地」と化していたために，国立公園創設によって生じる利害関係を調整するという困難な課題にあまり直面しなかったことも幸いしたのではないかと想像できる。

しかしポディイー国立公園は河川をはさんでオーストリアと向かい合っており，自然や景観を保護するためには両岸が一体となった事業が必要であることも多くの人々が認めるところであった。オーストリアの「マルヒフェルト運河運営協会 Die Betriebsgesellschaft Marchfeldkanal」代表として国立公園創設に尽力したラインホルト・クリスティアン氏が，ポディイー国立公園管理事務所発行の雑誌『タイェンシア』創刊号（1998年）に載せた報告書「タヤタール国立公園 —— ヴィジョンが実現する！」によれば，オーストリア側でも河川流域を保護する動きはすでに進んでおり，1988年に下オーストリア州政府によって，365ヘクタールという小規模なものであるがタヤタール自然保護区域が設定されていた[14]。体制転換の半年前の89年5月には両国の関係者たちが話し合い，共同のポディイー・タヤタール国立公園を設立するという目標が掲げられていた。その後ポディイー国立公園設立を受けて，これに対応するオーストリア側の国立公園設立に向けた努力が本格化するのだが，それが決定するまではなおも数年間を要することになる[15]。

オーストリア側ではモラヴィア側と異なり，東西冷戦時代にもディイェ川の岸辺まで一般の人々による利用が可能であったため，この地域には複雑な権利・利害が絡み合っていた。林業および農業関係者，さらに漁業関係者や狩猟愛好家たちにとって，国立公園設立はそれまでの活動を大きく制限されることを意味する。さらに河川沿いの自然保護区域創設は，電力業界の強力な反対に遭遇する可能性が高い。

そもそもディイェ渓谷については，100年以上前から，大規模開発を実現させてこれを経済的に活用しようという案が何度も浮上していた。前出のクリスティアン氏の報告書によると，まだハプスブルク帝国時代の19世紀から20世紀への移行期に「タヤタールを交通の動脈に」という声があがっていた。そして1907年にはモラヴィア側からハルデックまで電気鉄道を通す計画があったが，実現には至らなかった。またチェコが合邦される1939年には，観光客の増加に伴い，地域代表者たちが集まった会議で，タヤ川に沿った自動車道路を建設することが満場一致で可決された。合邦時代にはハルデックに堰堤を設ける案も浮上した。これらは第二次大戦のために実現せずに終わっている。さらに1980年代初頭には，チェコスロヴァキア政府がズノイモの南西約4キロメートルにある「牡牛岩（ビチー・スカーラ Byčí skála)」付近に発電所および貯水量約1億立方メートルの灌漑設備を計画した。このあたりでは河川は国境

線よりもかなり北側を流れており，法的には，チェコスロヴァキアはオーストリア側の同意なしに発電所を建設できるはずであった。しかしこれが一つのきっかけとなって，1984年秋にオーストリア側に「タヤタール保全のための市民イニシアティヴ Bürgerinitiative zur Erhaltung des Thayatales」が発足し，建設計画を撤回させただけでなく，さらに後の保護運動につながっていくことになった[16]。

国境が開放され，チェコ側の国立公園設立も実現して態勢が整えられつつあるなか，1991年2月にはオーストリア側の小都市レッツで「タヤタール・ポディイー・インター・ナショナルパーク」創設に向けて下オーストリア政府代表，環境省代表，ハルデック市，市民イニシアティヴ，チェコスロヴァキア共和国の専門家たちによる会合が開かれた。そして同年夏にはマルヒフェルト運河運営協会に所属する国立公園計画チームに，公園実現可能性の調査が委ねられた。主な内容は，①専門的立場からの基礎調査，経営及び機能面の構想，コストの査定，法的枠組みの調査，②住民への情報提供及び，土地所有者や利用権者を対象に国立公園受け入れ態勢を高めること，③国境をまたぐ国立公園のための基盤形成（チェコ側パートナーとの交渉，共通の利益の追求，組織構想）であったという。調査結果は1992年3月に示され，おおむね肯定的な見通しが与えられたが，土地所有者の一部に疑念や反対意見もあるとされた。また将来的に国際自然保護連合（International Union for Conservation of Nature　略称 IUCN）の認証を得られる可能性が高いという見通しも示された[17]。

これを受けて同年4月3日にハルデック市議会は国立公園設立を明瞭な多数で可決した。その後，作業は自治体レベルで進められ，1995年8月17日にハルデック市議会は，市民イニシアティヴ提案による「タヤタール国立公園規定」案を全会一致で承認し，これは下オーストリア州議会に送られた。同年末，役目を終えた国立公園計画チームは解散した[18]。審議は州レベルに移され，1997年10月27日に州議会は国立公園設立を正式に決定し，その規定は2000年1月1日に発効することになった。1998年1月1日には，オーストリア政府とタヤタール国立公園の関係を定めた法律も発効した[19]。新たな国立公園の総面積は1,330ヘクタール[20]で，ポディイー国立公園の5分の1という小規模なものであり，事実上，ディイェ川とその右岸の斜面，そして支流フグニッツ Fugnitz 川流域の一部を含むだけのものになっている。

5.「共生型」国立公園

こうしてディイェ川を包み込む形でポディイーとタヤタールの2つの国立公園が実現したが，両者の境界線（国境線でもある）は全長27キロメートルあり，その大半の25キロメートルはディイェ川が境界をなしている。国立公園内の水面を船舶などで利用することは，一部を

除いて禁止されている。ポディイー国立公園はゾーン1（中核区域 jádrové území，2,220ヘクタール），ゾーン2（管理区域 řízené území，2,260ヘクタール），ゾーン3（外郭区域 vnější území，1,780ヘクタール）からなる[21]。ゾーン1とゾーン2が全体の72パーセントを占めるが，この区域では標識のつけられたハイキング道およびサイクリングコース以外に立ち入ることはできない。タヤタール国立公園では，やはり標識のついた6本のハイキング道以外への立ち入りは禁止であり，公道を除いて，サイクリングのために国立公園に立ち入ることも禁止されている。日本の国立公園と比較して，規制の厳しさは際立っている。また国立公園内の国境線としてのディイェ川を渡ることができるのは，チェコ側のチージョフとオーストリア側のハルデックを結ぶ橋だけである。2007年12月21日にチェコ共和国はシェンゲン協定に加盟し，国境の通過は完全に自由になったが，上のような規制に関して一切の変更はない[22]。

タヤタール国立公園の創設が長期間の事業となり，しかも結果として国立公園としては極めて小規模なものになった原因は何よりも，この地域の歴史的条件のために土地所有関係が入り組み，また近年になって土地が集中的に利用されたことによる[23]。クリスティアン氏もまた，「全体的にこの準備計画においては，自治体，市民イニシアティヴ，チェコ側のパートナー，学識者，そして地域の利害関係者たちと極めて良好な協力体制を組むことができた」と述べつつ，6年近くも要した主な原因は「一部の土地所有者の反対，そして自然保護区域における補償のための交渉が長引いたことであり，これらは現在（1998年，筆者注）においても完全には解消していない」と述べている[24]。

しかし，1995年に解散するまで国立公園計画チームの計画責任者を務め，98年にタヤタール国立公園協会の事務局長に就任したロバート・ブルンナー Robert Brunner 氏は，2001年にチェコ側の雑誌『ポディイスケー・リスチー』に掲載されたインタヴュー記事の中で，「国立公園は一日でできるものではないこと，プラスの効果はすぐには表れないこと，少し待つだけで期待が実現するわけではないことを心得ておくべきでしょう」と述べ，将来への展望を語っている。さらに「自然には国境線も何もありません。川の真ん中を境界線が通っている渓谷ならばなおさらのことです。ここではチェコ側とオーストリア側の違いは存在しません。エコ・システムと生活空間はあまりに結びついているのです。共同計画が必要です。我々はディイェ川両岸に国立公園を実現させましたが，それだけでなく，この境界線の両側の自然空間が同じ目的のもとに管理されるよう尽力してきました」と述べて，「共生型 bilateral」国立公園の意義を強調している。そしてこの二つの国立公園が，ヨーロッパ各地に見られる「国境を挟んだ自然保護区域の共同作業」のモデルの役割を果たしていくという抱負を語った[25]。

ポディイー国立公園には，まさにここが国境地帯としての歴史をくぐり抜けてきたがゆえに存在する独特な「史跡」もある。公園西部にある小村チージョフは国立公園管理事務所の支部

が置かれる拠点であるが，ここからハルデック方面へ向かう道に入るとすぐ左側に，有刺鉄線による二重の柵が延び，遠くに監視塔が立っている。柵の下には金属製の障害物も目に入る。1990年2月に始まった国境地帯の有刺鉄線の「巻き取り作業」があまりに順調に進むのを見て危惧した人たちが，これを部分的に保存して教訓として残すように関係者を説得した結果であるという。撤去を免れたのは一本の鉄線防御柵と，チェコ語で「シュパチカールナ」と呼ばれる監視塔だけであったが，1994年にこれらは国立公園管理事務所の所有物となり，保存の対象となった。その後もう一本の防御柵と「チェコのハリネズミ」と呼ばれた障害物も「復元」され，現在は「鉄のカーテン博物館」などと呼ばれて見学者を集めているという[26]。

また，国立公園区域からわずかに外れるが，ヴラノフ城の西側の自動車道路から北側へ少し入った森の中には，1930年代末にチェコスロヴァキア政府が設置したいくつかのトーチカが残っている。これも内部まで修復されて「要塞博物館」として公開され，かつて国境付近が緊張に包まれていた時代のことを実感できる施設となっている。

おわりに

筆者は2018年9月10日にズノイモ市にあるポディイー国立公園管理事務所を訪問し，短時間だが所長代理のヤン・コス氏から近年の運営や活動状況について話を伺うことができた。ポディイーとタヤタールの両国立公園は，ともに2007年にユーロパーク連合 The Europarc Federation の認証を獲得し，2015年に更新されたが[27]，コス氏は両サイドの体制が整わなければこれは困難であることを強調されていた。国境線が密に引かれているヨーロッパでは，「国境線の通る自然保護区」はいくらでもあるし，事実，チェコ共和国の4つの国立公園はいずれも国境をはさんで隣国と接している[28]。ヨーロッパ全体を見れば，自然保護の必要性をいくら強調しても，両国の関係が良好でないために有効な手段がとれない例もあるという。歴史的に見ればディイェ川流域もまた1930年代と40年代に緊張に満ちた時代を経験し，結果として住民は大きく入れ替わった。そのことに関して両国の住民の間に感情的な問題が残っていることはないかとの筆者の質問に対し，氏は，個人的な見解だがと断ったうえで，70年も経過した今，そうした心配はほとんど感じないと述べた。なお現在，二つの国立公園の共同事業として，年に数回，自由な形で参加者を募って特定テーマを掲げたハイキングを実施しているという。

ポディイー及びタヤタールの両国立公園は，まさに国境線を包み込むような形で存在する。しかもその境界線の意味は時代によってさまざまに変化し，時には境界線自体が移動または事実上消滅したり，逆に一切人を寄せ付けない障壁になったりした。境界線に位置して激しい変

転にさらされてきたことも一つの原因となって，貴重な自然空間が維持されてきたとすれば，それは歴史の皮肉としか言いようがないかもしれない。しかし現在，この渓谷の両サイドの人たちが，一致協力してその維持・保存に努力を傾けているのだとすれば，それはそうした過去の経緯を乗り越えて，緑豊かな渓谷の持つ価値がこの地域の人々の心に今もなおしっかりと刻み込まれているからであろう。

本稿では国境線としてのディイェ渓谷一帯の歴史的変遷をたどりつつ，これが共生型国立公園として両地域を結ぶようになるまでをたどってきた。しかしこの一帯は本来住民構成も複雑であり，また一種の辺境であるがゆえに独特な社会を形成してきた地域でもある。ここで人々がどのように生きてきたかに関しても，注目してみたいと考えている。

（本稿は，科学研究費補助金，2017年度～2020年度，基盤研究B「変動するEU国境地域におけるエスニック集団共生の課題」の成果の一部である。）

《注》

（1） さらに詳しく述べると，下オーストリア州のドナウ川左岸は西のヴァルトフィアテル（森林地域）と東のヴァインフィアテル（ワイン地域）からなり，タヤタール国立公園は両者のほぼ境界上に位置するが，この地域区分は慣習上のものである。

（2） このほかズノイモの市街地にすぐ隣接して1962～66年にダムが建設されたため，その貯水池の水面が約5キロメートル上流まで国立公園区域に食いこんでおり，ここでも自然の河床は失われている。

（3） Walther Brauneis, *Das Thayatal: Landschaft, Geschichte, Kultur*. Verlag Niederösterreichisches Pressehaus, 1983,（以下 Brauneis, *Das Thayatal*）pp. 7-8, p. 10.

（4） Brauneis, *Das Thayatal*, pp. 8-9.

（5） Brauneis, *Das Thayatal*, p. 9.

（6） Brauneis, *Das Thayatal*, p. 10.

（7） Brauneis, *Das Thayatal*, p. 10.

（8） 矢田部順二「ズデーテン・ドイツ人――「追放」された昔の「隣人」は，今――」薩摩秀登編著『チェコとスロヴァキアを知るための56章』（第2版）明石書店，2009年，127～131頁。

（9） 1683年にポーランド王ヤン3世ソビェスキが，オスマン帝国軍によって包囲されたウィーンの救援に向かう際，軍隊がディイェ川を越えるのをこの地点から見守ったという伝承がある。

（10） 国境地帯に関するこれらの記述は，Jan Kos, Od železné opony po spolupráci na hranici, *Co ještě nevíte o Národním parku Podyjí ani po 25 letech od jeho vyhlášení?* Správa národního parku Podyjí, 2017, pp. 107-111.（以下，Kos, Od železné opony）および Železná opona v Čížově. *Podyjské listí. Informační zpravodaj správy Národního parku Podyjí.*（以下 *Podyjské listí*）1-5, 6 (2000), p. 10を参考にした。

（11） 景観保全区域（Chráněná krajinná oblast，略称CHKO）は国立公園に準じる自然保護区域として1950年代にチェコスロヴァキア政府が導入した制度であり，日本の国定公園にあたる。現在チェコ共和国には26の景観保全区域が存在する。

（12） Kos, Od železné opony, p. 109.

（13） ポディイー国立公園と同日に，ドイツ（バイエルン州）との国境沿いのシュマヴァ国立公園も

設立された。チェコ共和国ではこれ以外に，ポーランドとの国境沿いのクルコノシェ国立公園（1963年5月17日設立）およびドイツ（ザクセン州）との国境沿いのチェコ・スイス国立公園（2000年1月1日設立）がある。

(14) 1991年秋に410ヘクタールに拡大された。Reinhold Christian, Nationalpark Thayatal – Eine Vision wird Wirklichkeit! *Thayensia, Sborník původních vědeckých prací z Podyjí,* Správa Národního parku Podyjí, 1 (1998), pp. 13-28.（以下 Christian, Nationalpark Thayatal), p. 16.

(15) Kos, Od železné opony, p. 110.

(16) Christian, Nationalpark Thayatal, pp. 15-16.

(17) Christian, Nationalpark Thayatal, pp. 16-17.

(18) Christian, Nationalpark Thayatal, p. 16.

(19) Christian, Nationalpark Thayatal, p. 14.

(20) 2012年に拡大され，現在は1360ヘクタールを占めている（タヤタール国立公園のホームページ www.np-thayatal.at 参照。2019年1月9日アクセス。）

(21) www.np-thayatal.at　2019年1月9日アクセス。

(22) 以下のコス氏の記事による。Jan Kos, Podyjí a Schengenský prostor, *Podyjské listí,* 8-4 (2007), p. 10.

(23) Národní park konečně na obou březích Dyje, *Podyjské listí.* 1-1 (2000), p. 10.

(24) Christian, Nationalpark Thayatal, p. 19.

(25) Rozhovor s ředitelem Správy Národního parku Thayatal, *Podyjské listí.* 2-3 (2001)

(26) Železná opona v Čížově.（注(10)参照）

(27) ユーロパーク連合のホームページ https://www.europarc.org 参照。2019年1月21日アクセス。ユーロパーク連合はヨーロッパの自然保護区域を国際的連携によって守ることを目的に1973年に設立された組織であり，本部はドイツのレーゲンスブルクに，事務局はベルギーのブリュッセルに置かれている。

(28) この4か所はいずれも，国境の両側にまたがる自然保護地域としてユーロパーク連合による認証を獲得している。注(27)の資料参照。